

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：10102

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K20239

研究課題名（和文）歴史論争問題学習における生徒の感情変化と学習に与える影響

研究課題名（英文）Students' Emotional Changes and Their Impact on Learning in Learning History  
Controversial Issues

研究代表者

星 瑞希（Hoshi, Mizuki）

北海道教育大学・教育学部・講師

研究者番号：90966508

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：第一に困難な歴史の学習者の感情を実証的に研究する際の研究方法論を明らかにしたことである。特に、精神分析アプローチに基づく研究と社会文化的な視点に立つ研究の研究方法論を具体的に明らかにした。第二の意義は、社会文化的な視点にたち、日本の学校において朝鮮の植民地化の歴史を学んだ高校生の感情的な反応の実態を明らかにした。生徒の中には日本の過去の暴力行為に対して感情的に反応し、被害者をケアしようとする生徒がいる一方で、「日本は被害国である」と「韓国は不当な要求をしてくる国である」という表裏一体の犠牲者意識ナショナリズムを帯びた社会文化的に醸成されたナラティブが生徒のケアを阻害していた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

東アジアや日本の社会文化的な文脈が困難な歴史の学習者の感情をいかに誘発し、学習に影響を与えるのかを明らかにしたことが本研究の学術的意義である。また、日本の植民地政策に関する困難な歴史を扱う際の実践的示唆として2点示した。第1に、植民地化の歴史だけでなく、戦争などの国家の暴力行為を含む日本の近代史全体のカリキュラムを検討する必要性であることを示唆した。第2に、なぜ特定の他者をケアすることが難しいのか、どのようなナラティブがケアを阻害しているのかを生徒に考えさせることで、自分の感情がどのような社会的文脈の中で生じているのかを批判的に分析させることが有効であることを示した。

研究成果の概要（英文）：The first is the identification of research methodologies in the empirical study of the emotions of difficult history learners. In particular, it specifically clarified the research methodology for studies based on the psychoanalytic approach and those that take a sociocultural perspective.

The second significance of this study is that it clarified the actual emotional reactions of high school students who learned the history of Korean colonization in Japanese schools from a sociocultural perspective. While some students reacted emotionally to Japan's past acts of violence and tried to care for the victims, the socioculturally fostered narratives of "Japan is a victimized country" and "Korea is a country that makes wrong demands," which are inextricably linked with victimhood nationalism, inhibited student care.

研究分野：歴史教育

キーワード：困難な歴史 感情 歴史教育 論争問題学習 社会科教育 社会文化的アプローチ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

近年、歴史的事実の全面的な否定を試みたり、意図的に矮小化したり、一側面のみを誇張したり、何らかの意図で歴史を書き換えたりする「歴史修正主義」(武井,2021)が跋扈するなど、過去の事実認定や解釈を巡って論争(本研究では歴史論争問題と呼称する)が生じている。これまで社会科教育学において、アイヌや在日朝鮮人への差別を解消することを目標にした汎用性のある歴史授業やカリキュラムが開発されてきている(例えば、藤瀬 2007;山元 2011)。しかし、こうした歴史論争問題を授業で扱うのは一部の歴史教員に止まっており、多くの歴史教員が歴史論争問題を回避する理由の1つとして生徒を傷つけたり、生徒に不快な思いをさせたりしたくないと言った生徒の感情への配慮という要因が大きいことが指摘されている(例えば、岩崎,2016)。つまり、歴史論争問題を対象とした汎用性のある授業やカリキュラムが開発されても、カリキュラムを実践した際の生徒の感情的な反応の様態や教師による感情のケアに関する知見が蓄積されて、実践へ還元されない限り、歴史教師は歴史論争問題を授業で扱うことを回避する可能性が高く、学校教育の場においてマイノリティへの差別や抑圧を是正することは叶わない。

## 2. 研究の目的

本研究の第一の目的は、「困難な歴史」の学習者の感情に着目した研究(以下では、感情研究)をレビューすることを通して、感情研究の方法を明らかにするのみならず、研究方法を支持する理論的枠組みを含めた研究方法論を明らかにすることである。

第二の目的は、研究方法論の整理を踏まえて、日本において困難な歴史を学習する際の感情の様相や背景の一端を明らかにすることである。

## 3. 研究の方法

### 1) 感情研究のレビュー

第一の目的を果たすために、感情研究のレビューを行う。金・小野(2020)を参考に、近年出版された「困難な歴史」に関する著書を出発点(特に、Harris, Sheppard & Levy(2022)から多大な示唆を受けた)とし、その著書に引用されている文献を収集し、レビューを行った。さらには、全米社会科教育協議会(NCSS)が刊行する Theory and Research in Social Studies を過去20年分収集し、タイトル、要旨、キーワードから学習者の感情に着目した「困難な歴史」に関する論文を見つけ出した。

ただし、本研究はシステマティックレビューの方法を採用しておらず、収集した学習者の感情に着目した「困難な歴史」研究は部分的であると考えられる。そこで、本発表では後述する「困難な歴史」研究の類型を活用し、それぞれの類型において学習者の感情に着目した研究がいかにか、なぜ研究を遂行したのかを明らかにする。そうすることで、日本において「困難な歴史」を学習する際の学習者の感情を研究する際の示唆を導出する。

レビューの結果、「困難な歴史」の学習者の感情に着目した研究は、精神分析アプローチに立つ研究と社会文化的アプローチに立つ研究、それらの折衷型の3つに分類されることが明らかとなった。

精神分析アプローチに立つ研究は、Britzman(1998)の枠組みに基づき、社会的トラウマが含まれる歴史表象に対して、生徒がいかにかに反応するのかを明らかにした。Milesはこうした研究を通して、学習者が困難な歴史を学習する際に生じうる教師が予測できない事態を特定し、予防策のあり方を示唆する

ことをゴールとしている。こうした研究は日本において、「困難な歴史」を実践する上でも意義深いものになるだろう。

社会文化的アプローチに基づく研究は、学習者の感情が社会文化的に形成されることに着目し、いかに感情が形成され、学習にいかに関与するのかを明らかにする。Miles、紛争社会において自らの感情を反省的に考察し、他者の視点に立ち、他者と新たな関係を築くことをゴールとしており、そのために教室でいかに、どのような感情が生起し、対立しているかを明らかにする。Zembylas はキプロスという国内を二分する紛争の影響を現在でも受けている特殊な環境を対象としているため、日本とは文脈が異なり直接示唆を導き出すことは困難かもしれない。しかし、東アジアに視線を変えると、東アジアでは現在でも過去の解釈や過去に対する賠償や謝罪をめぐる感情的な対立が生じており、こうした感情的な対立が国家間の和解を難しくしていることが指摘されている（梅森 2021）。そこで、日韓（朝）関係や日中関係に関する「困難な歴史」を学習する際には、社会文化的に形成された感情が学習者に生起、その感情により抵抗や葛藤が生じることが推測される。そのため、教室においてこれらの歴史を学習する際に学習者の感情がいかに生起することは、学習者がそうした感情を批判的に捉える実践を構想する際の基礎となりうるだろう。

## 2) 学習者の感情に関わる調査研究

このケーススタディは、日本の首都圏にある高校の歴史の授業を対象としたものである。調査は 2021 年に行われたが、当時私はこの学校で非常勤講師として日本史を教えていた。私は当時 3 年目の若い教師だったが、歴史教師として、生徒には過去の不正義について倫理的な判断を下し、現代社会の歴史論争に参加できるようになってほしかった。そこで、「困難な歴史」を対象とした実践をいくつか行った。例えば、「単元」では「帝国主義時代における日本の韓国植民地化を正当化すべきか？」この授業では、日清・日露戦争を通じた日本の朝鮮植民地化の歴史的背景を取り上げ、日本の朝鮮植民地化の正当性を倫理的に判断するエッセイ課題を課している。私は生徒に、エッセイと一緒にこの単元のフィードバックを書くように依頼した。数名の生徒が、フィードバックにて不快感を示していた。そこで私は、生徒がなぜ、どのように違和感を感じ、その違和感にどう対処したのかをインタビュー調査から明らかにした。

エッセイと一緒に提出された授業後のフィードバックに不快感を示した学生 11 名（男性 2 名、女性 9 名）と半構造化インタビューを行った。分析は、まず生徒が不快感を感じた理由と、その不快感が学習に与えた影響に焦点を当ててコード化し、次にデータ同士を比較して分類した。その際に、本研究では社会文化的アプローチ（Zembylas2007）に着目して分析を行う。具体的には、生徒の感情を引き起こす社会文化的な文脈、特に社会文化的に形成されたナラティブに着目する。

## 4. 研究成果

多くの生徒が日本の加害行為に驚いていた。この驚きは、日本が韓国を植民地化する過程で武力行為を行ったことを生徒たちが知らなかったことに起因する多くの生徒が日本の加害行為に驚いた理由のひとつは、日本の加害行為と、「日本は被害国である」というナラティブとの間にあるギャップである。また、このようなナラティブを構成する要素のひとつに、日本は親切な国だというナラティブがあり、このナラティブは、日本の被害者意識を強調する一方で、加害の忘却を促す

生徒の中には、「日本は親切な国である」というナラティブとは対照的に、「韓国は不当な要求をしてい

る国である」というナラティブを持っている者もいる。「日本は被害国である」というナラティブと、「韓国が不当な要求をしている国である」というナラティブの両方に明確に言及した生徒は 1 人しかいなかったが、日本と韓国は二元的なナラティブのどちらか一方に位置づけられ、そのどちらかが日本の暴力行為に対する驚きという感情的反応に影響を及ぼしている。こうしたナラティブは授業内で体系的に身につけたものではなく、報道や SNS 上で非体系的に身につけており、生徒が授業内で感じた感情と密接に関係していた。

日本の加害行為に驚く生徒も多かったが、苦しんでいる朝鮮の人たちをケアしたいと思う生徒もいた。ある生徒は中学校の教科書で朝鮮の植民地化について学んだが、教科書にはあまり記述がなく、実態を詳しく知らなかったため、知らなくても自分には関係ないと思っていた。しかし、資料から日本の加害の実態を読み取ると、被害にあった朝鮮の人々をケアしようとしていた。

朝鮮の人々の痛みをケアし、自分自身の価値観や態度、信念を変えようとする生徒もいれば、「日本は被害国である」というナラティブや「韓国は不当な要求をしている」というナラティブを有している生徒の中には、朝鮮の人々の痛みを感じながらも複雑な感情を抱く生徒もいる。ある生徒は、被害を受けた朝鮮の人々の痛みをケアしようとしているが、「日本は被害国である」というナラティブに固執しており、大きな歴史の流れのなかでアジア・太平洋戦争における日本の敗戦と多大な犠牲をより重要視しているため、朝鮮の人々の痛みは過小評価されていた。別の生徒は、日本人の加害行為に恐怖を感じると同時に、被害を受けた朝鮮側の人々の痛みをケアしようとしているが、「韓国は不当な要求をしている国」であるというナラティブを有しているため、過去の日本の暴力行為を糾弾することはできずに、自らの考えや価値観を批判的に捉えることができていなかった。1 名に限定されたが、ある生徒は日本の植民地化によって被害を受けた人々へのケアを、植民地化の正当な理由を見つけることによって避けていた。この生徒は「日本は親切な国である」というナラティブと矛盾していることから植民地化の過程での日本の暴力行為に驚いていた。この生徒、保守的な思想をもつ母親とそのことを話す際に、植民地近代化論に立つ解釈を教えてもらい、そのことをインターネットで調べ、植民地支配を正当化する言説を獲得し、不快な感情を取り除いていた。

本研究における学生の感情的な反応は、東アジア、特に日韓関係に関する「困難な歴史」がいかに困難なものであるかについて問題を提起する。紛争社会とは異なり、今回の調査では韓国への憎悪を口にす生徒はいなかった。それどころか、韓国との文化交流に積極的でさえあった。また、文化交流のおかげで、ナショナリスティックな語りの影響により不快感を感じながらも、被害を受けた朝鮮の人々を思いやることができた生徒もいた。しかし、彼らはこの授業以外でも「日本は の国」「韓国は の国」といったナショナリスティックなナラティブに触れていたため、日本が朝鮮を植民地化する過程で行った暴力的で違法な行為を学ぶことに不快感を覚えていた。すなわち、これらの語りは「私たち（日本）」と「彼ら（韓国）」という感情的な線引きを形成するため、日本人生徒は違和感を覚えるのである。ここで興味深いのは、「被害国としての日本」というナラティブが植民地近代化論と結びついた唯一の例を除いて、日本の朝鮮の植民地化の歴史と直接的に関連していないことである。

このようなナラティブが成立するには、いくつかの条件があると考えられる。第一に、中学校までの日本の歴史学習は、加害者側よりも被害者側に重点を置いている。生徒全員が日本の加害事実を知らないと答えたのは、単に生徒の無知によるものではなく、日本の歴史教育のナラティブ構造に起因している。より正確に言えば、朝鮮植民地化に関するナラティブは単独では存在し得ず、特攻やアジア・太平洋戦争

の敗戦に代表される大きなナラティブ構造の中で意味を付与されている。つまり、生徒たちが朝鮮植民地化だけでなく、日本の歴史(近現代史)をどのように学んできたかによって、ナラティブが構築されているのである。第二に、学校外のメディアは、領土問題や「反日」についてのSNSや報道から明確に形成されたものであれ、「日本人は親切だ」などの発言から素朴に形成されたものであれ、ナラティブの形成と普及を支えており、生徒はそうしたナラティブを歴史の授業に持ち込む。

この調査結果はまた、日本の生徒にとって、植民地支配の影響を受けた人々やその傷を受け継ぐ人々へのケアがいかに難しいかを明らかにしている。言い換えれば、こうしたナショナリスティックな語りは、過去の暴力行為から目をそらす効果がある。例えば、朝鮮の植民地化における日本の加害行為は、日本は被害国であるという物語の中に位置づけられることによって矮小化される。ここでは「犠牲者意識ナショナリズム」(林,2022)が働いていると考えられる。犠牲者意識ナショナリズムとは、犠牲となった前世代の経験と地位を次世代が継承することで、現在のナショナリズムに道徳的正当性と政治的アリバイを与えるという記憶政治の一形態である。言い換えれば、「過去に多くの犠牲を払ったのだから、現在優遇して扱われるべきだ」というナショナリズムである。この考えは、自国民の犠牲を強調することで、他国民に対する加害の事実を相殺できるという幻想につながる。つまり、この考え方は、日本の歴史授業における他者へのケアを妨げる要因を説明する上でも有効であることが本研究の結果から明らかになった。さらに林は、日本の犠牲者意識ナショナリズムと韓国のそれは共犯関係にあると述べている。正確には、日本の保守派が犠牲者ナショナリズムに基づいて植民地主義を肯定する発言をすると、韓国では「韓国は被害者、日本は加害者」という構図が揺らぎ、結果として日本バッシングが起こる。その結果、日本の保守派のナショナリズムが強化され、「韓国は理不尽な要求をしている」という物語が構築・強化される。まとめると、生徒に違和感を抱かせる2つのナラティブは無関係ではなく、この2つの国の犠牲者意識ナショナリズムが対立・共鳴する社会的背景が、日本の植民地化によって被害を受けた朝鮮の人々へのケアを難しくしているのである。

林は、21世紀に東アジアの平和と歴史的和解を達成するためには、韓国と日本のナショナリズムの敵対的共犯関係を解体しなければならないと述べている。とはいえ、歴史教育によって社会構造を変えることには限界がある。歴史教育ですでできることは、朝鮮植民地の歴史だけでなく、戦争などの暴力行為と切り離すことのできない日本の近代史全体のカリキュラムを検討することである。近現代のカリキュラム全体を通して、日本が被害国であるというナラティブを生徒が有すると、植民地支配の過程で被害を受けた人々へのケアが避けられる可能性がある。ここでは日本がアジア太平洋戦争で敗北したことで国民に多大な犠牲を与えた敗戦責任と植民地責任を分別することが肝腎である。しかし、被害者と加害者の二項対立で大きな物語のバランスを取ろうという考えそのものが、犠牲者意識ナショナリズムの隘路に陥る危険性をはらんでいる。そこで第二に、なぜケアすることが難しいのか、どのようなナラティブがケアを阻害しているのかを考えさせることで、自分の思いがどのような日韓の敵対的・共犯的な被害者ナショナリズムを取り巻く社会的文脈の中で生じているのか、その社会的文脈を踏まえて歴史とどのように向き合うべきなのかを批判的に分析させることが有効であろう。このような社会的背景を踏まえて、歴史とどう向き合うべきか、倫理的な判断(Milligan, Gibson & Peck,2018)をさせることも効果的であると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 星瑞希
2. 発表標題 高校生は「困難な歴史」をいかに学ぶのか？－生徒が授業中に感じたネガティブな感情に着目して－
3. 学会等名 全国社会科教育学会第71回全国研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 星瑞希
2. 発表標題 「困難な歴史」研究において学習者の感情はなぜ、いかに研究されてきたのか
3. 学会等名 第72回全国社会科教育学会全国研究大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 星瑞希
2. 発表標題 日本において「慰安婦」はいかに教えられてきたか？
3. 学会等名 Korea-Japan Social Studies Teacher Conference
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------